

山田晶教授のアウグスティヌス研究

稲垣良典

山田教授の優れた研究活動の成果・学問的遺産の全体を適切に言いあらわす言葉の一つ選ぶとしたら、私は「信仰の知解」intellectus fideiこそそれである、と言いたい。ここで「信仰」というのは、わが国における西洋中世哲学研究の草分けであった岩下壮一神父が「信仰の遺産」という美しい言葉で呼ぶのを好んだ、キリスト信者が信仰をもって受けいれる真理の総体のことである。「信仰の知解」といえば神学 theologia のことではないか、あなたは山田教授を哲学者ではなく、神学者だったと言うのか、と異議を唱える人がいるかもしれないが、知恵の探求という観点から見れば、「哲学」「神学」という呼び方は問題ではない。アウグスティヌスもトマス・アクィナスもそうであったように、山田教授の生涯を通じての真理探究は、信仰の知解へ向けて集中的に進められたところにその独自の価値があると思う。

私が敢えてこのことを強調するのは、五十年近く、「先達」山田教授に導かれてきた者として、文字通り心に刻みつけられたことがあるからである。それは教授が折にふれてしみじみと語られた次の言葉に尽きる。「トマスは最期までアリストテレスを徹底的に研究し、註釈を書いていただけではなく、広くギリシア教父もふくめて教父たちの著作に親しみ、新プラトン哲学、ユダヤ、イスラムの学者たちにも目を配っていた。われわれもトマスのような仕事をしようと思ったら、狭い《専門》に閉じこもってはいけない。むしろ重要と思われる思想を、すべて徹底的に原典について研究すべきだ。」

そして山田教授自身、驚嘆すべき仕方でのことを実行しておられた。私が知っているのは教授の膨大な読書範囲の一端にすぎないが、ある時期、山田教授はカール・バルトの『教会教義学』、カール・マルクス

『資本論』、アダム・スミス『国富論』などを、ノートをとりながら、毎日時間をきめて読み進めておられた。また南山の研究室では「マンシの『公会議記録集成』(31巻)が手許にあるので、ずっと読んでいる」と嬉しそうに言われ、必要に応じて拾い読みした程度にとどまる私は大いに恥じ入った次第である。そして、このような生涯を通じての真理探究は、現代において、可能なかぎり豊かに「信仰の遺産」を継承し、新たに何かを寄与しようとする熟慮にもとづくものであった。

私は別の機会に(『創文』2008.6)「山田晶教授の中世哲学研究」と題した一文で、完成の暁には三千ページを超えるものとなるはずであった大著『中世哲学研究』(既刊4冊)について解説したので、ここでは、山田教授についての私の追想を交えながら、教授のアウグスティヌス研究の特徴をめぐって私の思うところを述べ、さきの一文の補足としたい。なぜトマス研究ではなくて(私にとってはむしろ不案内な)アウグスティヌス研究を取りあげるかといえば、アウグスティヌスは山田教授にとって単に学問的研究の対象であっただけではなく、若き日の山田教授がその著作のなかに自らの存在を沈潜させ、いわば共に悩み、苦しみながら真理を探究した「もう一人の私」であり、トマスへの関心もこのようなアウグスティヌス研究のなかで形成されたものであったからである。

山田教授は昭和31年、京都大学で開催された中世哲学会で「自然の光と恩寵の光」と題して、アウグスティヌスの照明説に関する研究発表を行われ、その前年、米国での4年間の留学を終えて帰国し、南山大学で教え始めた私にとって、この時が中世哲学会への最初の参加であり、また山田教授との最初の出会いであった。当時、大阪市立大学助教授に就任したばかりの山田さんは、伝え聞いたところでは京都聖トマス学院に籠りきりで『神学大全』の訳に取りくまれているとのこと、わが国における中世哲学研究の将来を一身に担う気迫が強く感じとられた。

発表の内容は、人間精神はそれを内から照明する神の光によるのでなければ、いかなる真理も認識することはできない、というアウグスティヌスのいわゆる照明説は、けっして後世誤って解釈されたように、真理認識の全体をわれわれの内て働く神の知性に帰し、人間精神はそれ自体まったく無力であることを主張するものではない、ということをつまの知性認識の理論をよりどころに説得的に論じたものであった。

論述の進め方でとくに感服したのは、照明説が広く誤解されるもとなつたマルブランシュの「人間精神はまず神を神自身を通じて知り、すべてのものを神において知る」という立場は、彼がアウグスティヌスに由来するものだと主張するにもかかわらず、けっしてアウグスティヌスの真意と一致するものではないことを示した上で、むしろトマスが行つたアリストテレス的と評される、能動知性の抽象の働きによる知性的認識の成立——したがってまた真理認識の可能性——の説明の方が、アウグスティヌスが照明説によって言おうとしたことを全体として理論的に明確にすることに成功している、という説明であつた。

私がこの山田教授の発表から大きな感銘を受けたことを今でもよく記憶しているのは、実はその場で「若気の過」としか言いようのない振舞いをしたからである。明快極まりない、堂々たる議論に圧倒される思いの一方で、私は何か一矢報いなければという気持ちにかられ、当時トマスの抽象理論について考えていたことも手伝って、山田教授の「抽象」理解にたいして、かなりきつい調子で異議を申し立てる質問をしてしまった。私の質問は発表の論旨に直接触れるものではなかつたので議論には発展しなかつたが、後日松本正夫先生に、相手を問いつめるような質問は先輩にたいする礼を失するものだ、むしろ自分の解釈を提示し相手の判定を仰ぐような問い方をしなさい、と不心得を戒められた。もとより山田教授にたいする敬服の念に变りはなく、昭和 40 年以降は山田教授が担当された中世哲学講座の一環であるトマスの倫理思想の講義を任されたのを機会に、親しく指導を受けることになつた次第である。

ところで、この発表については山田教授自身次のように述べておられる。「私はアウグスティヌスのいわゆる『光の説』をどのように理解したらよいか迷っていた。昭和三〇年ころから私は聖トマス学院で二三の友人と『スンマ』第二部の一を毎週読んでいたが、たまたま恩恵論のところまできて、第一〇九問一項『人間は恩恵なしに何か真のことを認識することができるのか』を読んだとき、トマスのすばらしい解釈に驚嘆した。それをもとにまとめたものが発表の原稿になつたのである」(『アウグスティヌスの根本問題』あとがき)。

山田教授はその著作のなかで繰返し、『スンマ』の翻訳の仕事にたずさわるようになってトマスを丹念に読むことで、それまで余りに明快で

割り切りすぎ、平板なように思われたトマスが、実はオウグスティヌスと深く通じ合う探求を、より明確に分節化された仕方で行っていることがわかり、トマスの著作のうちにオウグスティヌスの著作を読む手がかりをつかむことができた、と述懐しておられる。それは言いかえると、トマスの神学、あるいは哲学をトマスの意図に忠実に、つまりトマスのパーソナルな真理探究として理解するためには、オウグスティヌスがその生涯を通じて取り組んだ根本問題を常に考え合わせなければならない、ということであり、それが山田教授のトマス研究であった。

そのことは山田教授の重厚で独創的なトマスの「エッセ」理解においてあきらかに読みとることが可能である。トマスの「エッセ」理解の形而上学的革命ともいえる重要性は、彼以後のトマス学派や註釈家たちの間では注目されず、20世紀の実存哲学の台頭にもなつて「トマスの実存主義」として話題に上ったが、山田教授はトマスの「エッセ」は「エクシステレ」ではなく、むしろ「エッセはそこにおいてエッセンチア（ないしラチオ）がエクシステレする『場所』である」という解釈を打ち出された。その背後にあるのは、トマスの「エッセ」理解は、オウグスティヌスの「すべてのものはそれらを在らしめ、生命を与える神を離れては無である」という根本的経験を存在論として言語化したものだ、という洞察であった。

それにも劣らず重要なのは、トマスの「エッセ」理解は、精神は自己に立帰り、それを超越してゆく道の極みで存在そのものに到達する、というオウグスティヌス的「存在」経験にもとづくことの指摘であったと言ふべきであろう。このように、トマスという教師に導かれてオウグスティヌスの真意を解明することをめざす山田教授のオウグスティヌス研究は、実はオウグスティヌスがめざし、きり拓いた「信仰の知解」をトマスの分節化された哲学・神学にもとづいて明確に理解しようとする試みにほかならず、その意味で私は山田教授の卓越した学問的営為の全体を「信仰の知解」という言葉で言いあらわすことを敢えてしたのである。